

# 異文化交流と日本人

宮内 敦夫\*

これは、平成12年に東洋大学板倉キャンパス「東洋大学公開講座」—環境と国際交流の視点から—で行った「異文化交流と日本人」の講義録である。文体は「である」調で記述したい。

## 1. はじめに

今や、国際交流、異文化理解、文化間交流という言葉は、情報化という言葉とともに長いこと耳にしてきたが、最近では、グローバル化やグローバル・スタンダードやビッグバーン、そして、今度ではIT (Information Technology) という言葉が日常化し、21世紀は、外方的には世界の「国」という単位を区切る国境は溶けて無くなり、一方、内方的には「国」という中央政府の権限が弱まり地方分権が進み、住民が直接関わりの強い市町村単位のコミュニティーが中心となるのではないかと思われる。

物流と人々の交流と情報の交換によって、世界は益々近く、狭くなり、交流は密になった。インターネットの出現により、情報、商業からE-mailによる個人的な交流にいたるまで国際交流という言葉にふさわしい時代になってきた。テレビという情報手段や電話という通信手段が一般に普及したとき、情報は視覚化し、距離感がなくなったのと同様に、インターネットやE-mailは、今社会に大きな変革を急激に与えている。カナダの社会学者Marshall MacLuham (1911-81)の言うように、世界はますます狭くなり「地球村」(Global village)化してきた。このような世界の中で、われわれは世界人としてどのように生きていけばよいのか。日本人はどこをどうか変えていけば世界人になれるのか考えてみたい。

## 2. 国際化、異文化理解とは

国際化 (Internationalization) という言葉よりも、今ではグローバリゼーション (Globalization) という言葉をよく耳にする。遡れば、日本は奈良時代以前から中国や朝鮮半島から多くの文化を輸入してきた。明治時代になると開国とともに西洋文明が押し寄せ、欧化思想が主潮となり、その流れは今日も続いているとって過言ではない。その吸収力は魔法のスポンジであって、いくら吸収しても飽和状態になることがない。他国の国民性とは違って、自国の文化を捨てることなく、異質

---

\*東洋大学国際地域学部; Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

な文化を吸収し、共存あるいはそれを同化して新たな和洋折衷の文化を創出するところに日本人の大きな特徴がある。日本民族の持つ摂取融合の文化的特徴は、食物や衣類や宗教など、日常的な何をもみても顕著である。

しかし、100年前の国際化と今の国際化では別物である。明治時代の西洋の進んだ文物を取り入れ、世界の列強に追いつけ追い越せという後進国の辿る文化の輸入の時代は終わり、今は産業先進国として世界をリードする立場での国際化である。文化の輸入ではなく輸出の時代である。工業立国である日本は、自国の利益ばかり追い求めて、世界の平和維持に貢献しなければ、もはややっていけない。工業資源から食料まで外国に依存しなければ、今の経済的豊かさは享受できない。未発展国や発展途上国に対して経済協力や技術協力をし、世界平和を維持するために応分の負担を負うのは当然のことである。

国際主義 (Internationalism) の反対は国家主義 (Nationalism) であるが、日本のように資源の乏しい工業国で食料の多くを輸入に依存している国は、世界の平和と安定が生存の基盤であって、徳川時代のような鎖国的な政策では言うまでもなく生きていけない。国際化は、日本にとってはキーワードであって、世界の中でどう行動すべきか、どのような貢献ができるかは、現在の先進国としての主導的地位と豊かさを維持するためには、われわれ日本人個々に課せられた課題である。Edwin Reischauer は、「日本は、孤立という古い防御的な殻にはもはや体が大きくなりすぎて入れない生物のようなものだ。現代の諸条件の下では新たにもっと大きな殻を作ることはできないのであるから、おのが身を守るための新しい方策を講じなければならない。国際化は明らかに日本がその繁栄を維持し平和に生存するための唯一の途である。」(The Meaning of Internationalization 1989) と言っている。

### 3. 日本人と西洋人の国民性

国際社会で他国民と交流する場合、彼らの風俗習慣、ものの考え方すなわち国民性、文化というものを何も知らないで、同じ人間なのだから自分と同じだと思うとうまくいかない。それとの比較において、自分はどのような民族でどのような考え方をするのかを知ることが同時に大切なことである。

日本人と西洋人を比較した場合、両者の間には対照的な相違点がある。一概には言えないところもあるが、日本はグループや組織を重んじる集団指向型社会 (Group-oriented Society) に対して、西洋は個人を大切にす個人指向型社会 (Individual-oriented Society) である。他に、前者は、縦型社会 (Vertical Society)、集団社会 (Collective Society) などと言われ、後者は、横型社会 (Horizontal Society)、個人主義社会 (Individual Society) などと言われる。戦後、「個人」とか「個性」とかいう言葉が人工に膾炙し、経済的に豊かになると何にでも「マイ」が付き、「マイホーム」「マイカー」など馴染みの表現がしきりと言われてきた。今の若い人たちの生き方を見ると、これは個人主義の生き方かと思える。しかし、真の個人主義ではない。個人主義とグループ主義の境界線は容易に越えられるものではない。概して、利己主義的、自己中心的 (自己チュー) である。民族の根元的特

質は、長い歴史の中で築かれた国民性であるので、50年や100年とい短い期間では変わらないものである。次に、日本人と西洋人の民族性の由来を考えてみた。

#### 4. 稲作民族と遊牧民族

大昔まで遡れば、日本人は稲作民族であり、西洋人は遊牧民族であると言われる。それらの日常生活の特徴は、この両者のものの考え方を良く示してくれる。現在のような農業機械が登場する前の稲作を体験した人ならすぐわかることだが、稲作は年間作業である。籾種を苗代に蒔いて早苗を作り、梅雨の水で田圃を耕し苗代を作り、稲を植える。夏の間水を管理し田の草取りをして秋を迎える。稲刈り、そして田圃を乾燥させ、家に運んで脱穀、そして筵で干して、次は籾すり、そして俵詰め、これで11月か12月までかかってしまう。冬の間は、翌年の収穫に備えて縄や俵を編みをする。1年がかりの作業である。当然定住型の生活にならざるをえない。日本には210日、220日という言葉があるように、台風の襲来は農民の頭からは離れない。1日の遅れで収穫量に影響する。1週間遅れで稲は実らない。限られた期間に作業するためには、当然人手がいる。協同や助け合いが欠かせない。家族が大切であり、近所や村のつき合いが大切である。

一方、遊牧生活の第一の特徴は移動である。牧場で家畜を飼育する前は、草のたくさんあるところに羊を連れて行き、そこで遊牧し、草がなくなると次の草場に移動する生活である。遊牧生活では、今でも1人40頭の羊を飼えば生活できるそうである。移動するのに、仲間が多ければ安全であり孤独ではない。しかし、1家族200頭で3家族で移動すれば、3分の1の期間で次の草場に移動しなければならない。当然できるだけ小グループあるいは単独で行動する方がよい。去年たくさん草のあった場所に行ってみたら、他人が来て放牧しているかも知れない。自分の羊にも草を食べさせるためには、相手とうまく交渉しなければならない。無口では駄目で多弁でなければならない。ちなみに、遊牧とは英語でnomadicと言うが、これには「おしゃべりな、多弁な」という意味がある。移動の過程で他の氏族や他民族と接触が多くなるので混血も起こりやすい。

稲作民族と遊牧民族の生活様式から生まれる民族的特徴を対比してみると、次の様な点が拾えよう。

稲作民族（日本人）	遊牧民族（西洋人）
定住	移動
集団尊重、遵奉 個の否定 和の重視	個人尊重 自己中心的
縦型社会性	横型社会性
単一民族性	混血の発生
協同、協調性、	自己主張
依存	自立、独立
無口、表現下手 内向的	多弁、表現上手 外向的
他と「同じ」を良しとする	他と「異なる」を良しとする

近視的狭角的視野	遠視的広角的視野
あぜ道の水漏れを見つけながら歩く前屈の姿勢	羊の群を見張る高い姿勢
内と外に分ける	個々に分ける
同情のもとに干渉する	干渉しない

同じ農耕民族でも稲作民族と小麦やジャガイモなどを作る畑作民族では性格は違う。この板倉の周辺を見ても板倉の南地区のように米作中心で、水が命の農民と千代田町の方の畑作中心の農民では気質と団結心がかなり違うという。板倉の人は団結し、集団の和を重んじ、リーダーに嫌々ながらも従おうとする。

狭い土地で肩を寄せ合って土着の生活をしてきた日本人の稲作民族の特性を、日本の長い封建制度によって一層強固のものになったと考えられる。日本の宗教も集団指向性を助長すのには影響している。自然を神格化しその子孫であるとする神道、自然を重んじ自己を空にする仏教は日本人の性格形成に果たした役割は大きい。

日本と西洋の社会と個人の関係を果物にたとえると、日本社会はリンゴであり、西洋社会はグレープフルーツである。日本の社会は、全体が先あって次に個がある。個は密接に他の個と重複し、全体の中に融和し目立たない方がよい。リンゴを割ってみればわかるように、中心の核ははっきりしているが、果肉は一体で個々が独立していない。これに反して、グレープフルーツのような柑橘類は果肉がはっきり独立しており、核がない。独立した果肉の集まりが全体を構成している。これがまさに西洋の個人主義の横型社会である。このような特性からして、日本人は個人として特徴に欠けるが、集団としての個性がはっきりしているという特徴がある。

## 5. 日本人の自然観

自然界を観る目も日本人と西洋人とでは違う。日本の自然は全体的には温暖である。西洋の大陸的な気候ははるかに厳しい。われわれは、「自然の母の胸に抱かれて」などよく言うように、自然は敵ではなく、父であり母である。西洋の自然観は厳しいものである。アダムとイヴが禁断の実を食べたため、人間の浅はかな智恵で自分で食を探し自分で考えて生きていくようにとエデンの楽園からエデンの東の苦の地に神に追放されたが、その過酷な世界が自然である。したがって、自然は克服すべき敵である。日本の伝統的詩歌には、自然の移り変わりや花鳥風月を詠ったものが多いが、西洋では日本のように自然そのものを愛でる詩歌は少ない。19世紀のワーズワースなどの自然主義は自然回帰であり自然賛歌であるが、自然そのものの賛美ではなく、人間中心的であり、人間と神の使者としての花鳥、自然との対話である。

## 6. 恥の文化 (Shame-culture) と罪の文化 (Guilt-culture)

日本の文化は恥の文化であり、西洋の文化は罪の文化であると定義したのは、『菊と刀』のルース・ベネデクトである。定住する農村的社会では、村の和を保ち、構成員は融和しみんなと同じでありたいと願う。人間の暮らす場を西洋の考えではコミュニティとか社会とかいうが、仏教用語で「世間」(logada)という。日本人の行動基準は、自分の行動が正しいか間違っているかをはかる基準はこの世間体であるというのだ。一方、西洋社会では、行動基準は神の正義である。われわれは世間体を重んじる。「みっと(見る人)もない」「世間様に顔向けができない」「世間に笑われる」「恥さらし」など、世間体を気にする言葉はいろいろある。われわれは集団と「同じ」であり、一体であれば安心できるが、もしそこに差違が生じたとき「恥」を感じるのである。良くも悪くも目立つことはいけないのである。一方、西洋人は、独立的で他と異なるところに主体性(identity)を認める。彼らの行動基準は、他人や所属集団ではなく、神の正義である。もし間違った行動をとれば、最後の審判で裁かれる。仏教でも、この世の罪は、死後35日目に地藏様に連れられて閻魔様の法廷に行き裁かれるが、わえわれの顧問弁護士地藏様は実は閻魔大王であって、われわれを法廷で待たせて退席し、裏に回って閻魔大王に変身して裁判長席に着くのである。非常に寛大であるので、極悪人でも改心の情があり、子孫が死後毎日故人の成仏を願って祈る気持に免じて寛大な判決を下してくれるのだという。ユダヤ教やキリスト教やイスラム教の神ははるかに厳格である。日本の最近の世情を見ると、世間体も神も仏もない、捕まれば知らぬぞんぜん、証拠が固まれば、世間に申し訳ないといい、暫くすれば、自ら禊ぎをしてしまう。恥はあっても罪のない国である。

## 7. 言語表現と伝達

集団指向の単一的な民族の日本人社会では、全体の和を保つためには、全体の方向性を乱すようなよけいな発言はしない方がよい。議論を戦わせ、白黒をつけてしまうと後にしっくりしない関係が残ってしまう。したがって、無口な方がよいとされてきた。これは縦型社会の特徴である。われわれは、長い歴史の中で無用な議論をすることは慎んできた。曖昧な言葉や遠回しな表現の中に相手の真意を読むことが大切である。したがって、口べたで、西洋人のような理詰め議論に慣れていない。多弁な民族との会議では、日本人は寡黙になりがちで、無能で何の考えもないのかと誤解をされがちである。単一的民族で互いの考え方がよくわかっている単一的(同一的)民族社会(High-context society——アメリカの文化人類学者 Edwin Hall の用語)では、顔の表情や沈黙や身振りで十分効果的に意思伝達ができる。言葉は、メッセージの手段の一部にしか過ぎない。日本の文化では、話し手のメッセージを理解する責任は聞き手である。

一方、西洋人社会(Low-context Society)は、多弁で伝達のほとんどすべてを言葉に依存する。遊牧民が知らない土地に行き、知らない人あるいは異民族と交流し交渉するとなれば、言葉以外に伝達の手段はない。共通の理解はないのであるから、はっきりとものを言うことが大切である。雄

弁に相手を説得した者の勝ちである。西洋人の言語表現は、相手に理解してもらうのではなく相手を理解させる言語行動である。メッセージの理解の責任は聞き手でなく話し手にある。はっきりと直接的に言葉で伝達することである。

日本の縦型社会・集団指向社会では、敬語や丁寧語や謙遜表現が多いが、英語ではないわけではないが少ない。平等な立場で発言できる。日本語では「わたし」「あなた」にはいろいろな表現があるが、英語では、「I」と「you」しかない。和を重んじる日本語と自己主張する英語では、「はい」と「yes」の使い方も違う。たとえば、「リンゴは好きですか」に対して、好きであれば、「はい、好きです」と答える。「リンゴは好きではありませんか」といわれれば、「いいえ、好きです」と答える。英語では、“Do you like apples?”でも“Don't you like apples?”でも、いずれの文に対しても、肯定であれば、“Yes, I do.”否定であれば、“No, I don't.”である。日本語では相手に迎合する表現形式であるために、「はい」と「いいえ」の使い方が肯定疑問文と否定疑問文とでは異なる。英語では、両文とも好きなら“Yes”、嫌いなら“No”である。これは自分の意向を直裁に表示する機能語だからである。

## 8. まとめ——特異性より共通点を

ソ連の共産主義体制が崩壊し、東西冷戦対立がなくなったら、民族紛争や宗教紛争や人権と干渉の問題が表に出てきた。アフガニスタンの内戦、インドのヒンズー教とイスラム教の宗教対立、チベットの独立運動、パレスチナとイスラエルの対立、クルド民族の独立、セルビア共和国のコソボ自治州の独立運動、それを阻止しようとするセルビア軍のコソボ進駐と撤退を求める空爆、ミオシェビッチ大統領の民族浄化政策 (ethnic cleansing) と失脚、アフリカではスーダンのイスラム系住民と非イスラム系住民との内戦、ルワンダのフツ族とツチ族との対立。めまぐるしい多くの問題が次々起こり、世界全体が安定し平和になることはない。

こういう世界の情勢の中で、われわれはどうすべきであろうか。世界の主要先進国である日本は、厚い殻に隠り、豊かさを享楽していられない。資源を輸入し工業製品を世界に輸出して生計を立てる肥大化した日本人が隠れる新しい殻はもはやどこにもない。国内的基準 (domestic standard) と国際的基準 (global standard) というダブル・スタンダードを使い分けて利己的に生きることは許されない。グローバル・スタンダードはアメリカン・スタンダードだといったところで、これを無視できない。これに順応できる経済力、政治力、文化の質的向上を図って足腰を鍛えなければならない。世界と同じ価値観に立たざるをえない。日本が生き残る途は、世界に財政的、技術的、文化的に貢献し、平和で安定した持続可能な社会 (sustainable society) を維持するよう務めることである。それは、国家や大企業がやることだと他人事として無関心ではいられない。なぜならば、集団の意志を決定するのは個人であるからだ。

個々の日本人にとって、国際化とは世界市民意識を涵養することである。それは、具体的には異文化を理解することであり、異なる文化を持つ人と交流することである。そのためにはまず日本人

自身のものの考え方や文化を理解すること、己を如実に知ることである。そして、日本民族の特異性を強調するにとどまって先に進まないのではなく、特異性を自覚した上で、他民族の特異性に理解を示し、両者の共通性を探ることが異文化交流、文化間交流の途であろう。John W. Dower は *Embracing Defeat* の中で、日本人はステレオタイプの見方をするより、多様性と変化、共通性を重んじることが大切である。日本の文化は、古くは中国、韓国、インド、そして近代は西洋の文化の混成であるので、日本人のダイナミズム（活力・力強さ）に期待できると言っている。

日本人はスポンジのようなもので、他国の文化を次々と吸収して、既存のものと同化して消化不良や自己矛盾を起こすことがない特異な民族である。それは、宗教においても言語においても食物においてもあらゆるものにおいて言えることである。今度は、今まで吸収し蓄積してきた文化を日本人の勤勉と協調性などの生活習慣と共に輸出する時になったのだと思う。